

第 22 回日本分類学会連合公開シンポジウム

「標準和名って何？—その歴史と現状、展望まで—」

主催：日本分類学会連合

共催：国立科学博物館

日本魚類学会

日 時

令和 5 年 1 月 7 日（土）13 時 30 分～16 時 10 分

会 場

オンライン開催（Zoom）

プログラム

13:30～13:40	開会あいさつ・趣旨説明 (伊村 智：国立極地研究所)
13:40～14:00	【基調講演】標準和名とは何か：その歴史と概念の成立 (瀬能 宏：神奈川県立生命の星・地球博物館)
14:00～14:20	小さな生き物に名前を付ける意義：海産無脊椎動物の和名問題 (大塚 攻：広島大学)
14:20～14:40	モズクとモヅク：一つに決まらない海藻の種の和名と日本藻類学会の取 り組み (北山太樹：国立科学博物館)
14:40～14:45	休憩
14:45～15:05	世界中の哺乳類に和名を付ける：世界哺乳類標準和名目録 (川田伸一郎：国立科学博物館)
15:05～15:25	日本鳥学会の取り組みと鳥の和名の命名法 (西海 功：国立科学博物館)
15:25～15:45	昆虫の和名にみる思い思いの命名問題 (渡辺恭平：神奈川県立生命の星・地球博物館)
15:45～16:05	総合討論
16:05～16:10	閉会あいさつ (藤田敏彦：国立科学博物館)

司会進行：本村浩之（鹿児島大学総合研究博物館）

開催主旨

生物の日本語名（和名）には、地方名や品種名、商品名など様々ですが、中でも標準和名は生物の分類単位や分類階級を特定するための学術的日本語名であり、社会的に生物についての共通理解を得るためのキーワードです。例えば、「同じ種」であれば原則として「同じ標準和名」で表記される必要があります。このことは学術研究の分野に止まらず、学校教育や社会教育はもとより、行政や法律の現場においてもきわめて重要な意味を持っています。しかしながら、標準和名には異名（同一種に対して複数の名称がある場合）や同名（異なる種に対して同じ名称がある場合）、音揺れによる不統一（ホホとホオ、四つ仮名表記など）、差別的語（メクラやバカなど）に起因する不使用や言い換えなどの混乱がみられ、その解決は様々な事情から容易ではありません。本シンポジウムでは、標準和名という概念がどのような歴史的経緯を経て成立したのかを解き明かし、併せて様々な分野の実情を共有することで課題解決に向けての理解を深めるきっかけにしたいと思います。

日本分類学会連合代表

伊村 智

標準和名とは何か：その歴史と概念の成立

瀬能 宏（神奈川県立生命の星・地球博物館）

キーワード：本草学、蘭学、洋学、翻訳、教科書

日本の生物の多くには学名とは別に日本語の名前＝和名が付けられている。和名には地方名や商品名などがあるが、中でも種や属、科といった生物の分類学上の単位に固有な名称である標準和名は、対象となる生物を特定し、共通の理解を得るために欠かせないものであり、学問の進歩や普及、教育に大きく貢献してきた。学術出版物、博物館や水族館はもちろんのこと、行政や法律の現場でも活用されている。ここでは学術研究の成果を社会に還元する役割を果たしている標準和名のルーツについて話題提供する。

本草学の漢名と和名

本草とは、動植物や鉱物などのうち、薬になる自然物のことで、植物（草類）が多いため本草と呼ばれる。生物名称との関連が深い本草書が登場したのは10世紀に遡るが、江戸時代になって李時珍の大著『本草綱目』（1592年）が中国から渡来すると、本草学は日本国内の情報が加味されつつ博物学的な発展を遂げる。小野蘭山の『本草綱目啓蒙』（1803年）では漢名や和名とともに本草の特徴が記載された。栗本丹州の『皇和魚譜』（1838年）をはじめとする図譜や、岩崎灌園の『武江産物志』（1824）に代表される地方生物相を扱った産物志が多数刊行された。本草学には西洋分類学の形而上学的な思考とは異なり、生物全体を階層的に捉える発想がないため、名称の多くは必然的に種のレベルに対応していた。漢名は明治中期まで生物の「正名」とみなされており、その対訳である和名は明治初期の教科書編纂の際に生物種の名称として重用された。

洋学と分類体系の理解

江戸時代の中期に徳川吉宗が推し進めた享保の改革（1716–1745年頃）の一つに、キリスト教に関するものを除く洋書の輸入解禁がある。ヨーロッパで出版された様々な分野の書籍が輸入され、洋学者により翻訳が進められた。伊藤圭介はツェンベリーの『日本植物誌』（1784年）の掲載種を目録化した『泰西本草名疏』（1829年）で学名と和名、漢名を初めて対応させただけでなく、リンネの植物分類体系を解説する過程で分類階級の「綱」や「目」、「種」を訳出した。宇田川榕庵はオランダ語の洋書を広く閲読して『植学啓原』（1835年）を著し、多くの植物学用語とともに分類階級の「属」を訳出した。西洋の分類学の分類体系や分類階級の理解が進んだことは、後に高次分類群の和名創造の際の土台となった。

教科書と高次分類群の和名

明治維新直後の1871年に文部省が設置され、翌1872年には学制が發布されたが、その前後に博物学の教科書が多数刊行されている。初期の教科書は例えば大森秀三による『博物新編譯解』（1868年～1870年）のような海外の自然科学書の翻訳本であった。中でも太田

美濃里筆記による『斯魯斯氏講義動物学』（1874年）と田中芳男訳纂の『動物学 初篇 哺乳類』（1874年）は、和名を用いた詳細な分類体系の解説がある点で重要である。特に後者は哺乳類に限られるが、現代の目・科・属に相当する分類群について和名と学名とを併記した点が注目に値する。この時代の教科書に登場する名称は、高次分類群の和名のルーツになったと考えられる。

標準和名の誕生

1877年に東京大学が設立されると、本格的な大学教育や生物の研究がスタートした。初期の大学では西洋の最先端の学問に追いつくことが目標であり、それは分類学においても同様であった。学術の世界における生物の名称とは学名であり、日本国内でしか通用しない和名が開学当時の大学で顧みられることはなかった。しかしながら、様々な日本産生物の分類学的な研究が進み、研究成果を社会に還元する必要性が出てきたことで状況は変化していった。1887年に『植物学雑誌』が創刊されると、その第1巻第1号に牧野富太郎は論文「日本産ひるむしろ属」を発表した。牧野はササエビモをはじめとする4つの植物和名について、既存の名称に適当なものがないため新たに命名したことを論文中に明記した。これらの名称は分類学を背景に種に対して新しく命名された初めての和名と考えられ、その命名法を含めて標準和名の概念の原型とも言えるものである。

課題と展望

標準和名とは何か？そのルーツは平安時代にまで遡る。本草学と洋学を土台にして明治初期にその概念はほぼ確立したと言えるが、一方では標準和名がいかなるものか、今日に至るまで学術界に統一的な定義はない。教育の分野でも標準和名は文部科学省から否定されたことはないが、推奨もされていないのが現実である。標準和名には学名における命名規約のような厳格なルールがなく、紳士協定として運用されているが、研究者個人では解決できない問題も多い。学術の世界と一般社会とを繋ぐキーワードであるからこそ、学術界に統一的なルールの策定あるいは合意形成が求められている。



明治時代の教科書。左：宮崎柳條『通常植物小誌』（1883年）、小学中等科用；右：丹波敬三・柴田承桂編『普通動物学』（1883）。前者では種の名前に漢名と平仮名の和名が併記されていること、後者では科や属にも和名が付されていること、和名には漢字や片仮名が混在していることに留意。

小さな生き物に名前を付ける意義：海産無脊椎動物の和名問題

大塚 攻（広島大学）

キーワード：無脊椎動物、カイアシ類、ウオジラミ類、中文名

生物の学名はいずれの生物群も国際命名規約というルールによって細かく規定されており、学名の安定性が保たれるように工夫されている。一方、標準和名は公的に定められた規定がないものの、自然史系科学分野のみならず一般社会にも必要不可欠なものとなっている。マスコミでよく取り上げられる生物、例えばイヌ、クルマエビ、イチョウ、シイタケなどを学名で呼んでいけば、一般の方々は親近感を失いかねない (*Homo sapiens* だけは例外か)。意味をなさない“jargon”と感じるかもしれない。和名の重要性が認識されているにも関わらず、統一的なルールは皆無であった。分類学に関する学会が一同に集まる日本分類学会連合こそが唯一無二、標準和名のルール策定可能な組織であろう。

動物では、分類群によって標準和名の有無に顕著な差がある。これは、人間にとっての有用性や有害性あるいは人間が認識しやすい形態的特徴を有すること、興味を持つ程度、さらには分類学研究者がタクソンに標準和名を与える慣習、熱意あるいは雑誌、本の編集者の意識に依存している。大型動物や人間との関わりが深い種を多く含む分類群、例えば、哺乳類、鳥類、魚類、昆虫類、貝類などは通常、標準和名が与えられている一方、線虫類、小型甲殻類（特に、種多様性の高い海産自由生活性カイアシ類）、あるいは小型の浮遊性あるいは間隙性の動物などに標準和名が与えられることは少ない。

水圏では生態学的、水産学的に特に重要なカイアシ類を例にとってみよう。浮遊性種は魚類の天然餌料として最も重要であり、日本からは 1,000 種以上知られているが(日本分類学会連合ホームページ「日本産生物種数調査」 2022 閲覧)、標準和名を持つものは少ない。一方、寄生性種は有用魚類に寄生しているものも多く、ウオジラミ類などは養殖産業に甚大な経済的損失を与える場合があり、標準和名が付与されていることが多い。北隆館から 1965 年に出版された『新日本動物図鑑 (中) (岡田要ら監修)』のカイアシ類に関する部分でそのことが顕著である。自由生活性種は学名の読み方を単にカタカタにしたものが記されている一方、寄生性種の全てに和名が付与されており、カイアシ類としては統一性に欠けた状態になっている。これらは別な執筆者が担当したのである。その後、保育社から 1995 年に発行された『原色検索日本海岸動物図鑑 II (西村三郎編著)』ではその状況が改善され、底生性種に多くの和名が「新称」として提案されている。

標準和名はどのようにして付けられるか考察してみたい。長澤ら (2010)は主に魚類に寄生する日本産ウオジラミ属 *Caligus* の 33 種の標準和名を記した。そのうち、29 種に「新称」、3 種に「改称」した和名を付した。本属は、頭胸部と第 3 胸脚から形成される吸盤と体前方にある額板(frontal plate)に位置する 1 対の補助吸盤(lunule)によって魚類の粘液表面に特化した吸着方法を進化的に獲得している(Kaji et al. 2012; Ohtsuka et al. 2021)。そのため、これ

らの吸盤の形態は保守的で種間変異が少ないが、生殖に関与する部位の性的二型は種の特徴が顕著である。一部の種を除いて宿主特異性が高いため、これらの標準和名のうち 23 種が宿主に由来した名称であった(70%)。この他、分布・生態に基づく名称は 6 種(18%)、命名者に因んだものは 2 種(6%)、形態に基づくものは 1 種(3%)、学名の種小名に基づくものは 1 種(3%)であった。この命名は、ウオジラミ属が主に魚類の寄生虫であり、日本で科学的に記載されたのは昭和に入ってから事情と関連すると考えられる。宿主の魚類などと異なり、江戸時代までの古典的文献などで扱われてこなかったからだろう。このようなステレオタイプの形態を示す微小甲殻類の和名を考える上で参考になるのが、中国語の文献である。動物の分類に関する中国語の文献では各種に「中文名」が与えられている。中文名についても統一的なルール作りが現在も議論がなされている。例えば、原記載における Etymology を重視して中文名を付ける、複数の中文名がある場合には(国際命名規約に準じて)先取権を認める、学名の種小名に人名由来の名前が付されている場合は人名を漢字に訳して最初の 1 文字を当てて「~氏」とする、など記憶しやすく、かつ適用しやすいものであるべきという原則が提案されている (Zhang et al. 2015)。このような原則を意識しているため、中文名には学名を直訳したものが多く、和名を付ける際に非常に参考になる。例えば、ウオジラミ属の *Caligus multispinosus*、*C. undulatus* の中文名はそれぞれ「多刺魚蝨」、「波紋魚蝨」である。また、浮遊性カイアシ類の *Tortanus gracilis* には「瘦歪水蚤 (こちらはシラミでなくノミ)」と付されている。

標準和名は、一般社会へ自然科学を普及する上で、また、生物多様性の保全上、重要な意義を持つ。しかし、その命名、利用には独自のルールも必要である。例えば、魚類の標準和名の変更に見られるように差別用語の使用は避けられるべきであろう。ルール策定には以下のような配慮が必要であろう。(1)学術社会のみならず、義務教育の教科書作成にも関わることであり、関連省庁との議論が必要であろう。(2)和名の安定性において問題が生じた場合、これを解決する公認の常設委員会の設置が必要である。(3)和名の選定方法。ある分類群に特化した学会がある場合にはその分類群について、社会状況、歴史などを配慮して標準和名を選定する。そのような学会がない場合には個々の研究者に判断が委ねられ、常設委員会で検討するなどの制度設計。(4)ルール策定の第 1 段階として、目標、規約条項、策定期限などの具体的合意形成が必要である。



図. ウキウオジラミ *Caligus undulatus* Shen & Li, 1959 (中文名:波紋魚蝨) の成体メス。原記載から 60 年経過して宿主(サッパ、コノシロ)が判明した、特異的な生活史を持つ種(Ohtsuka et al. 2019)。

モズクとモヅク：一つに決まらない海藻の種の和名と日本藻類学会の取り組み

北山太樹（国立科学博物館・植物研究部）

キーワード：異物同名、海藻、現代仮名遣い、同物異名、和名

海藻は曖昧模糊な呼び名で、自然な分類群ではなく、定義によってその範囲も変わる。ここでは主要な海産大型藻であるアオサ藻綱（緑藻植物門）、褐藻綱（黄藻植物門）、真正紅藻綱（紅藻植物門）の3グループを対象に、それらの種の和名における問題を紹介したい。

日本海藻学の祖、岡村金太郎（1867–1935）以来、長年にわたり整理されてきた海藻の和名に問題は少ないが、同物異名（synonym）・異物同名（homonym）や差別語は近年まで残っていたし、仮名遣いの不統一は現在でもみられる。これまで海藻の和名には明文化された命名規則がなく、図譜・図鑑・目録などによって広く普及した名前が結果的に「標準」和名の役割を果たしてきた。和名には良い面も悪い面もあるが、何よりも通常日本語として扱えることは便利で、和名があるおかげで日本人は多くの海藻についてほぼ誤解なく会話することができる。一名法をとる和名は分類学上の変更に影響を受けにくく、アオノリ属（*Enteromorpha*）がアオサ属（*Ulva*）に併合された2003年以降も、スジアオノリは「スジアオサ」ではなく「スジアオノリ」と呼ばれる。厳格なルールブック（国際命名規約）に従う学名の方が不安定で、系統関係が明らかになるたび改名されるのは皮肉なことである。

海藻でも同物異名・異物同名はかなり整理されている。しかし、学名が発表の日付に基づく優先権を重視するのに対し、和名では早くにつけられた名前が必ずしも定着するとは限らない。定着していたはずがいつの間にか忘れられ、新しい名前が与えられてしまうこともある。陸上植物や海産動物との異物同名は今日でもみつけることができる（図1）。

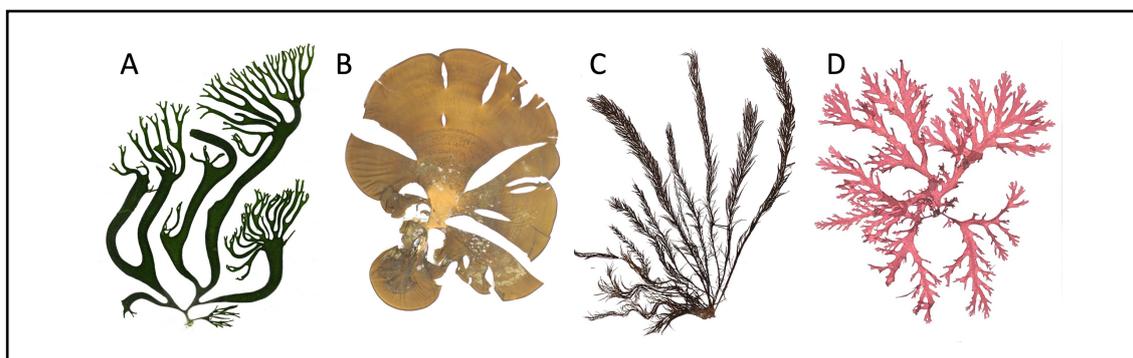


図1. 海藻における同物異名 (A)・異物同名の例 (B~D) A. クロミル (アオサ藻)。異名「ウツロミル」が使われることがある。B. ウミウチワ (褐藻)。刺胞動物に同名のサンゴがあり、海産動物学者との会話で誤解が発生する。C. マツモ (褐藻)。被子植物に同名の水草がある。D. ナミノハナ (真正紅藻)。脊索動物に同名の硬骨魚がある。

海藻の和名に残された問題は仮名遣いである（図2）。その多くは、海蘊の仮名表記に「モズク」と「モヅク」がみられるように、いわゆる四つ仮名に起因する不統一である。日本語の仮名表記は、敗戦直後の1946（昭和21）年公布の「現代かなづかい」により旧仮名遣いから改変されたが、その40年後に公布された「現代仮名遣い」の曖昧さが原因でイワズ（ヅ）タ問題が発生した。例えば、「ウミブドウ」（商品名）で知られる括れ蔦の表記には「クビレズタ」と「クビレヅタ」で揺れている。どちらかが間違っているわけでもなく解決が難しいが、リスト、索引や辞書などを作る際の障害となる。仮名遣いの問題は他の多くの生物分野で解消されており、海藻の和名でも早期統一を図るべきである。

日本藻類学会は、近く藻類における和名の提唱と使用に関する規約（ガイドライン）を制定・運用する「藻類和名委員会」を立ち上げる。門・界レベルで異なる高次分類群間の異物同名の発生予防などが期待される。日本産のほぼ全種に和名がある海藻に限れば、標準和名の指定も不可能ではないが、藻類は形態も生態も系統も多様な分類群からなるため、この委員会では藻類全体での命名法の統一や和名の標準化は目指さない方針が予定されている。



図2. 表記に揺れがみられる海藻の例 E. クロキヅ（ズ）タ（アオサ藻）。文化庁は「クロキヅタ」、環境省は「クロキズタ」を使う。F. イチイヅ（ズ）タ（アオサ藻）。G. フトモズク（褐藻）。「フトモヅク」と表記されることがある。H. シマオウギ（褐藻）。「シマオオギ」と表記されることが多い。I. ヒビロード（真正紅藻）。「ヒビロウド」と表記されることが多い。J. カタバベニヒバ（真正紅藻）。かつては差別語を含む「カタワベニヒバ」が使われていたが、2015年に筆者が「片葉紅檜葉」の意に改称を提案した。

世界中の哺乳類に和名を付ける—世界哺乳類標準和名目録

川田 伸一郎 (国立科学博物館)

キーワード：チェックリスト、日本哺乳類学会、分類群名・標本検討委員会

全世界を網羅した哺乳類の和名を含むチェックリストは今泉吉典により 1988 年に『世界哺乳類和名辞典』として発表された。この本では約 4,500 種の哺乳類が掲載されているが、その後の分類体系の改変により、2005 年に発行された『Mammal Species of the World, 3rd edition』では 5,416 種に分類するとされるに至った。その後も毎年 20 から 30 種程度新種の哺乳類が発見されているが、そのほとんどには和名がなかった。それらは学名の発音をカタカナ書きで示されたり、「～の仲間」といった形で表記されたりするなど、自由な名称で呼ばれることもしばしばあった。近年特にインターネットを主体とするマスメディアの発達によって、世界中の動物が画像や動画で簡単に閲覧できるようになっている。そのような媒体に登場する哺乳類を日本語の名前で呼び、その和名の一般化を図るためにも、今泉(1988)に続く最新の「世界哺乳類和名辞典」的なものが求められていたと思われる。そこで、日本哺乳類学会の分類群名・標本検討委員会では、世界中の哺乳類に学会推奨の標準和名を決定して社会に発信することにより、動物園・マスメディアといった外部機関に一貫した和名の仕様を促すプロジェクトを 2014 年から開始した。

標準和名リストの底本は Wilson & Reeder (2005) 『Mammal Species of the World, 3rd edition』を学名リストとして使用し、それに今泉 (1988) の『世界哺乳類和名辞典』で定められた和名を照合し、属名の変更などがあったものも含めて学名と和名の対応関係を整理した。また日本哺乳類学会が 2009 年に出版した日本産哺乳類図鑑『Wild Mammals of Japan』等いくつかの文献を使用して学名リストを補完し、最終的に標準和名リストに掲載する種数を 5450 種とした。その結果 1500 種程度が過去に和名を与えられたことがない種だった。これらに対して各分類群の専門委員により和名が考案された。最終的に標準和名リスト案が完成したのは 2017 年 8 月のことで、これを学会ホームページで公開し、学会員からコメントを募集した。それをもとに最終的な修正を加え、9 月に学会理事会で承認を得ることができた。この標準和名リストは解説文をつけて、哺乳類学会の和文誌『哺乳類科学』の別冊として、2018 年 6 月に出版された。また利便性を考えて、リストのエクセルファイルを学会ホームページでダウンロードできるよう 2019 年 1 月 24 日に公開した。公開ページには利用規約を定め、それを読んでチェックボックスを押せばダウンロード可能になる仕組みとした。

ちょうどこの頃、世界の哺乳類に関するチェックリストとして、アメリカ哺乳類学会が「Mammal Diversity Database」を作成し、『Mammal Species of the World, 3rd edition』以降に行われた新種記載や分類学的変更を加味した 6,495 種のリストを一般公開した。その

後定期的にバージョンアップが行われ、現在 6,596 種にまで増加している。また 2020 年に Burgin et al. 編の『Illustrated Checklist of the Mammals of the World』が出版され、哺乳類の分類総説には大きな動きがあった。委員会としては、とりあえず現在のリストの属名などについて変更があったものについてはすべて修正することで対応し、現在学会ホームページからダウンロードできるのがそのリストである。ただし和名がつけられていない残り 1,000 種余りにどのように対応していくかはいまだ検討中である。

日本鳥学会の取り組みと鳥の和名の命名法

西海 功（国立科学博物館・動物研究部）

キーワード：亜種名、種名、鳥類目録、日本固有種、標準和名

日本の鳥の標準和名は日本鳥学会が1922年に日本鳥類目録（初版）を出版した時に始まる。2022年がちょうど100周年だった。当初提唱された標準和名は亜種に付けられており、種には付けられていなかった。また亜種には一意的な和名が付けられたものの1亜種に複数の和名が与えられているものもあり（例：*Bubulcus ibis coromandus*... Amasagi, Shojosagi, *Demiegretta sacra ringeri*... Kurosagi, Shirokurosagi.）、それは第4版（1958）まで続いた（例：アマサギ・ショウジョウサギ、イワミセキレイ・ヨコフリセキレイ）。第5版（1974）になってようやく種に標準和名が付けられるようになり、1種にただ1つの一意的な和名が与えられるようになった。

鳥の標準和名の原則として、『日本鳥類目録第6版』（2000）では次の3点を明文化している。1）亜種のない種（単形種）は種の和名をもつ、2）種に2つ以上の亜種がある場合（多形種）でも日本にその種の1亜種だけが分布する場合には種の和名と亜種の和名は同一にする、3）日本に2亜種以上が存在する場合は（迷鳥を含む）、日本で繁殖する亜種（2亜種以上繁殖する場合には本州、特に本州中部以北の亜種）、もしくは一番普通の越冬亜種の和名を種の和名と同じにし、そのほかの亜種にそれぞれ別の亜種名を与える（その場合の亜種名は、種の和名に形態的特徴か地域名を形容詞としてつける）。

鳥の和名は基本的にこの原則に従って付けられており、その結果、ある分類群が亜種から種に格上げされた場合には、和名が短くなることもある。例えば、ウチヤマセンニュウ *Locustella pleslei* という日本周辺の島嶼域で繁殖する鳥がいるが、かつて第5版までは北海道以北で繁殖分布するシマセンニュウの亜種 *L. ochotensis pleslei* とされ、ウチヤマシマセンニュウと呼ばれていた。

近年、世界の鳥類目録のほぼ全てが、種の境界を以前よりも狭くとらえる傾向にあり、種の分割がいくつかの種でおこなわれ、30年前には9千種だった世界の鳥の種数が1万種余りに増えた。このような傾向を受けて、今年9月の出版予定で編集準備している次の第8版では、日本に分布する600余りの種のうち10種あまりの種が2種以上に分割されることになった。その結果、現在10種ほどの日本固有種がさらに5種増えることとなった。それらはこれまでの亜種名がオガサワラカワラヒワ、オリイヤマガラ、ホントウアカヒゲ、リュウキュウサンショウクイ、キジ（キジのみ亜種群名）であるが、種に格上げされることでオガサワラカワラヒワはオガサワラヒワに、オリイヤマガラはオリイガラに和名を短くし、その他は短くできないため変更しないことが日本鳥学会から昨年2月に提案された。パブリックコメントで意見募集をおこなったところ、この和名の変更についてデータベース的な

観点から 1 件の反対意見が寄せられたが、当初提案通りに上記 2 種は和名を短く変更する予定になっている。

その日本鳥学会のパブリックコメントに関連して、大きな問題になったことがある。それはアホウドリの和名が差別的に感じてかわいそう、あるいは不快で、変更してほしいという要望だった。鳥学会の目録編集委員会や評議員会で検討したが、自然史系関連諸学会での差別的和名・不快和名の変更基準の一つに（魚類学会が示した）複数の和名が使用され混乱が生じていることがあげられるが、アホウドリはそれには該当せず、この変更には説明や意見交換、関連諸学会との調整などが必要で、次の版の改訂には間に合わず、先送りすることになった。

世界の鳥類種は 1 万種を超えると述べたが、一部の世界鳥類分類データベースでは暫定的な和名が掲載されているとはいえ、標準和名と呼べるものが全て決まっているわけではない。ただ世界の鳥の和名は山階（1986; 世界鳥類和名辞典、大学書林）が 9,021 種に付けた和名が基本的に使われているので、それらについては標準和名と呼べる。つまり 1,000 種近くには標準和名と呼べるものが近年までほぼなかったが、山崎ほか（2017; 山階鳥学雑誌 49, 31-40）や山崎・亀谷（2019; 山階鳥学雑誌 50, 141-151）などがフクロウ目や亜鳴禽類などの和名を示すなど徐々に再整備が進められている。

その他、鳥の和名に関して一般の方からの質問で多いのは、「アオ」の使い方がある。鳥ではアオは現代で言う青に限定されず、昔の寒色全体を指す名称となっている。つまり青い鳥には使われず、アオゲラやアオサギ（蒼鷺）など緑や灰色の鳥に使われる。対して、鮮やかな青い鳥はルリカケス、ルリビタキ、オオルリなどルリが使われる。それは昆虫などとも共通するのかもしれない。



図. 新たに日本固有種になるキジ

昆虫の和名にみる思い思いの命名問題

渡辺恭平（神奈川県立生命の星・地球博物館）

キーワード：愛好家、益虫、害虫、研究者、図鑑、膨大な種数

昆虫は全生物の中で最も種数が多い分類群である。現時点で世界から約 100 万種が知られており、日本分類学会連合が 2002 年 12 月 31 日時点で日本から記録されている生物種数を集計した「日本産生物種数調査」では、30,304 種の昆虫が日本から確認されている（カマアシムシ目、トビムシ目、コムシ目を除く）。

昆虫は種数のほかに、その多様な生態や形態、害虫や天敵としての人間社会とのかかわりなど、多くの点で注目されやすい分類群であり、身近な場所に見られることから、一般の市民が関心を抱くことも少なくない。また、日本は世界的に昆虫愛好家が多い国の一つであり、子供から高齢者まで、様々なレベルの昆虫愛好家が各地で活動しており、一部の愛好家はハイアマチュアや地域の自然史研究の担い手として、研究者とともに日本の昆虫学を支えている一面もある。

日本に昆虫愛好家が多い理由の一つに、和名の存在が挙げられる。明治時代より始まった日本の近代化において、西洋の昆虫学の知識を日本にもたらし、国内における近代昆虫学の基盤を整えた研究者として北海道大学の松村松年（まつむらしょうねん）博士が挙げられる。その代表的な著作である『日本昆虫学』や『日本千虫図解』により、和名の普及が図られた。これらの著作には地方名など、複数の和名が存在する昆虫類の名称の標準化の意図も認められる。また、当時は害虫の防除が国是と言っても良い状況であり、農家や非分類学者とのコミュニケーションには、学名ではなく、和名を基とした方が合理的であったものと推察される。これらの意味では、標準和名の理念は明治時代には萌芽していたとも考えられる。

その一方で、種数が膨大であることに加えて、愛好家や研究者が多いことに起因し、昆虫の和名には様々な問題が引き起こされている。とりわけ、各人各様に和名を命名する（できる）点は問題であり、ガイドブック的な図鑑や各地方の同好会誌で命名行為が現在も行われており、中には新称や改称を付さぬために、和名のルーツが辿れない事例も多い。また、すでに多くの文献で広く定着している和名が、研究者や愛好家の一存で改称されてしまう例も多く、異名をいたずらに増やし、そのために一般市民にも混乱が生じる事態となっている。近年、昆虫学分野でも「標準和名」を用いる研究者が演者も含め増えてはきたが、その定義や方針については昆虫学者内で統一されておらず、日本昆虫学会が近年刊行を継続している「日本昆虫目録」でも、和名の命名は各著者に委ねられ、事実上野放図のままである。特に昆虫愛好家の界限では「和名の命名は学名と違い規則がない」、「コンセンサスが得られない和名は自然に使われなくなる」という意見をよく聞く。しかしながら、実際にいくつもの問題が生じている以上、何らかの仕組み作りは必要であろう。

演者は大学入学前からチョウや甲虫といった人気のある分類群を対象に。愛好家として活動したのちに、寄生蜂という愛好家がほとんどいない分類群の研究に取り組み、情報普及のために和名の命名行為も行ってきた。また、博物館学芸員や分類学者として様々な人々とも「和名」を共通言語として交流を重ねてきた。本講演ではそれら経験も交えながら先述の背景や問題点を述べ、昆虫分野の実情に即した、理想的な和名の在り方について私見を述べたい。

なお、演者が昆虫の和名において特に検討すべきと考えている点としては下記の 2 点である。

- ① 亜種には和名を付さない（○○亜種とする）。
- ② 昆虫愛好家や分類学者以外も接する昆虫（一般向け図鑑に掲載されている種や害虫、益虫）の改称や新称については、和名を検討する委員会を学会に組織する。

また、以下の点については、未だに昆虫の研究者と愛好家の中で意見が割れている点である、これらについても、将来的には学会の差配で方針を決めるべきである。

- ① 例えばタマムシ科とタマムシのような場合、後者を区別しやすいようにヤマトタマムシと扱うか、否か。演者はこの場合 Buprestidae の和名は「タマムシ科」であり、*Chrysochroa fulgidissima* の和名は「タマムシ」であることから、後者を改称する必要はないという立場である。
- ② 語尾が高次分類を反映している和名において、分類群の高次分類が見直された際に、関連して語尾を修正すべきか否か。演者はこの処理の厳密な運用は和名の合理性を損ねるため反対であり、特に社会で既に用いられ、改称の影響が予想される分類群においては研究者が独断で決めるのではなく、パブリックコメントのような仕組みの導入が必要と考える。

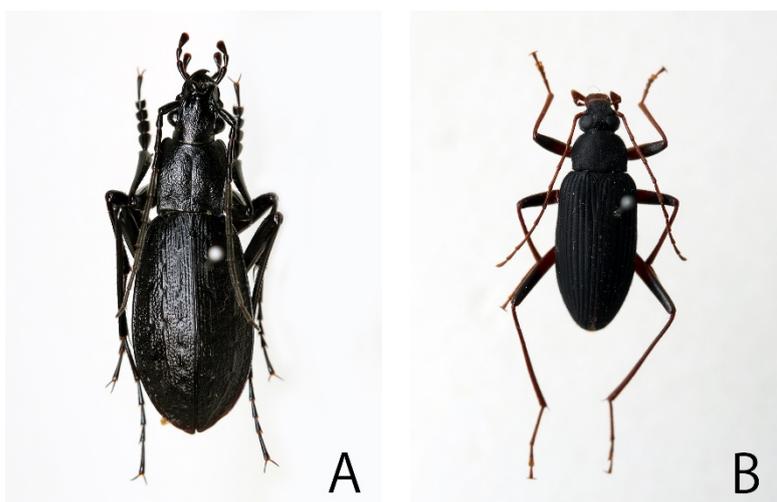


図. 混乱を招く和名の例. A: ホソヒメクロオサムシ丹沢亜種（亜種に対しタンザワホソヒメクロオサムシの和名がある。また、ホソヒメクロオサムシに対してアルマンオサムシの別名がある）。B: オオクチキムシ（様々な媒体で慣用的に用いられてきた和名であったが、最近某図鑑でホンダクロオオクチキムシに改称されてしまった）。

日本のアザミウマ450余種を詳説

新刊 日本原色アザミウマ図鑑

岡島秀治・榎本雅身／著

B5判 624ページ(カラー48ページ・モノクロ576ページ)

定価：本体20,000円+税 ISBN978-4-88137-202-9

アザミウマが同定できる専門図鑑が必要

これまで、わが国では重要害虫種のアザミウマのみに情報が集中してきた。応用昆虫学上大切なことではあるが、反面、重要害虫はほんの一握りにすぎず、侵入種の増加などを視野に入れると、アザミウマ全体に対する正しい同定技術の普及は急務。

カラー生態写真で生時の色彩や形態をありのままに再現

種の正確な同定には、脱色されたプレパラート標本は必須であるが、一方で生時の状態を正しく把握しておくことも重要である。本図鑑のために撮影された189種319点のカラー写真が、科・亜科・属の特徴などの基本情報を生き生きと伝えてくれる。

きわめて質の高いモノクロ写真画像を多用

種の解説を1種1ページに統一。1種当たり10点程度の細密モノクロ写真図版を掲載し、同定のポイントとなる表皮の表面構造や刺毛配列などの微細構造を適確に表現。画像はプレパラートにしたうえで深度合成技術を用いて顕微鏡撮影し、手書き図を上回るナチュラルで高精細のクオリティを実現。

英文併記の解説、検索表、研究史から標本作成法まで

各論ではアザミウマ各種の形態、分布、生態を解説し、形態についての英文を併記した。これにより海外の読者はもちろんのこと、アザミウマ研究を志す初学者にとっても大いに有用である。概説では分類、生態、研究史、分布、採集、標本作成について解説。

約50%に縮小



約50%に縮小

